

2010 年以降の中国大陸における沈從文研究の新動向

羅勛章著 齊藤大紀訳

富山大学人文学部紀要第 67 号抜刷

2017 年 8 月

2010年以降の中国大陸における沈從文研究の新動向

羅勛章著 齊藤大紀訳

沈從文研究は空白からスタートし、30年の研究の蓄積を経て、次第に周縁から中心へと位置を移した。作家としての沈從文も文学史のディスカールの周縁から中心へと位置を移した。沈從文が中国現代文学史における一流作家であることも基本的にすでに定説となっている。1979年にはじまって、歴史家、批評家、読者が沈從文と彼の創作について関心を抱きつけ、当初は沈從文の文学的成果の証明、テキストにおけるイメージの分析、思想の考証が行われ、ついで世界を視野に入れて沈從文と世界の作家との比較研究が行われ、やがて沈從文の創作を中国の現代化の過程に組み入れて考察を行った。この過程によって、沈從文に対する認識は次第に文学の領域から文化の領域へと足を踏み入れたのであった。絶えることなく派生する新しい方法、新しい視角、新史料の発掘によって、沈從文研究の視野は、ますます広がっている。まさに一部の学者たちが指摘するように、30年の研究は、研究者たちが力を入れて発掘した沈從文の生命主体と文学精神について、いくつかのキーワード——「牧歌情緒」、「人間性」、「生命観」、「文体作家」、「田舎者」、「モダニズム」など——で概括することができるだろう。「これらのキーワードは、沈從文研究をほぼ終始つらぬき、しかも『沈研』の現在における全体的なモデルと基本的なトレンドとを構成し、ぬぐいさることのできない『沈研』の固定観念と繰り返し研究されるための内在的なテンションも形成した。¹⁾」2010年以降の沈從文研究は、この学術的基礎において深化したばかりでなく、グローバル化およびグローバル化がもたらした中国の現代化の進展によってその歩みを大きく進め、新たな様相を呈したのである。沈從文の作家や学者としての個別の価値、沈從文の文学創作における場の影響、沈從文の文学創作に対する啓発と指導、文化資源の伝承と発揚としての沈從文など、いずれも過去において深められなかった、あるいは研究が展開されなかったものである。

2010年以降の沈從文研究については、2016年5月の時点までに中国知網（CNKI）において、「沈從文」を主題キーワードとして検索される研究論文が2044編あり、北京大学図書館や南京大学図書館に所蔵される主要雑誌に掲載された文章は576編である。「沈從文」をタイトルキーワードとして検索される研究文献は1131編であり、主要雑誌が331編である。

この時期の中国現代文学主要作家の研究状況は、作者をテーマとした検索によれば、魯迅研究10979編、主要雑誌3874編、郭沫若研究2054編、主要雑誌546編、茅盾研究1368編、主

1) 趙学勇・魏巍「1979-2009：沈從文研究的幾個關鍵詞」『中国現代文学研究叢刊』2010年第6期

要雑誌 515 編, 巴金研究 935 編, 主要雑誌 214 編, 老舍研究 1454 編, 主要雑誌 388 編, 曹禺研究 1058 編, 主要雑誌 321 編, 張愛玲研究 2383 編, 主要雑誌 503 編, 錢鍾書研究 1454 編, 主要雑誌 388 編であった。

この時期の中国現代文学主要作家の研究状況は, 作家の名前が入った論文タイトルの検索によれば, 魯迅研究 5117 編, 主要雑誌 2094 編, 郭沫若研究 875 編, 主要雑誌 222 編, 茅盾研究 419 編, 主要雑誌 151 編, 巴金研究 417 編, 主要雑誌 98 編, 老舍研究 680 編, 主要雑誌 192 編, 曹禺研究 438 編, 主要雑誌 126 編, 張愛玲研究 1458 編, 主要雑誌 299 編, 錢鍾書研究 249 編, 主要雑誌 68 編であった。

上述のデータが示すのは, 沈從文研究の中国大陆における重要性と注目度は, 魯迅にはおよばないけれども, 現代文学史が構築された初期のそのほかの五大老「郭茅巴老曹」をはるかに超えていることである。沈從文が研究される度合いは, 夏志清『中国現代小説史』の評価観念が中国に導入された後に文学史の書き換えが引き起こされ, 同時に発掘された現代作家の張愛玲とほぼ同レベルであり, 主要雑誌の沈從文研究論文のタイトルによって見れば, 沈從文はよりいっそう主流の研究者の注目を浴びているのである。

1. 事績研究——沈從文の後半生の精神と思想の浮上

沈從文研究において, 創作主体としての沈從文の前半生に対する探究は, キンクレーと凌宇の大著の後を継ぎ, これまでに多くの評伝が著されている。しかし 2014 年の張新穎『沈從文的後半生——1948-1988』の出版によって, 沈從文の事績と思想の研究は新たな段階に入った。張新穎の沈從文の後半生に関する研究は, 1997 年の『論沈從文: 從 1949 年起』に始まる。『沈從文的後半生——1948-1988』には, それ以前の伝記あるいは評伝と比べて, 二つの特徴がある。一つ目は歴史叙述の方法によって沈從文の建国後の精神の道程を記述したことである。「私は沈從文の後半生を書いたが, 事実にもとづく社会的経歴と境遇とを書きたかったばかりでなく, 動揺する時代の中にある, 彼個人の長い内心の生活をよりいっそう書きたかった。しかし豊かで, 複雑で, 長期にわたる個人の精神活動は, 推測や想像や虚構によってではなく, それを彼自身の表白に見なければならぬ。幸運なことに彼は大量の文字資料を残してくれた。私は, 彼自身の文字をできるかぎり直接に引用するようにつとめ, 私自身の語りを代用して叙述を新たに編成しなおさないようにした。²⁾」実際には, 沈從文自身の文献の基礎にたち, 張新穎は, 同時期の文壇の状況を映し出す大量の史料——たとえば建国初期に王瑤が編纂した『中国新文学史稿』の沈從文小説に対する評価——も溶け込ませ, よりいっそう客観的な沈從文を表現している。同書は「王瑤は, その著作の自序で, 彼がその教材を編纂・執筆した『根拠と方向』は,

2) 張新穎『沈從文的後半生 1948-1988』広西師範大学出版社, 2014 年

教育部が招集した全国高等教育会議が承認した『高等学校文法両学部カリキュラム草案』の『中国新文学史』のカリキュラム規定と内容説明なのであった。」周知のように、建国初期にあって、教育部のカリキュラム草案は、カリキュラムの内容について、きわめて強い拘束力を有していた。張新穎の著作は、王瑤などの文学史家の沈從文評価に論及するとき、議論が基本的に公平である。さらに幅広い資料が収録されていることも、同書の重要性を増させるものである。たとえば、1962年8月、ワシントン大学の施友忠がロンドン『中国季刊』1963年春季号に発表した「揺旗呐喊者と逃避主義者：老一輩的中国作家」は、沈從文の旧体詩と文物研究に従事することになった選択とに論及しており、西洋の学术界でもっとも早く1949年以降の沈從文を議論したものとなっている。これはきわめて価値の高い資料である。二つ目は精神活動の叙述であり、個人の生命が時代と摩擦を起こしたときの強靱さと力強さを浮かび上がらせていることである。まさにこの点にこそ同書の意義が存在する。同書が述べるように、「強大な潮流が力の尽き果てた後で衰退し、弱小な個人が歴史の中から立ち上がり、今日と将来まで歩みを進める。³⁾」同書中の資料は、大多数が沈從文の書信とその他の史料文献から採録されているものの、文体の求めるところによって同書の叙述も沈從文の文章と呼応し、散文化した表現はきわめて強い詩的文学性を同書にあたえている。

これと対照的なのが李揚の『沈從文的家国』である⁴⁾。同書は、2006年に作者が書き上げた『沈從文的最後四十年』⁵⁾の姉妹編であり、よりいっそう沈從文の故郷と国家への心情という視角から資料を構成し、後半生の部分は基本的に前著を踏襲するものの、沈從文の後期の思想と人間関係についてより具体的な資料を提供している。たとえば、沈從文と郭沫若、丁玲、蕭乾、范曾らとの関係について深く掘り下げて整理し、観念の面では沈從文の伝統的文化の心理に注目している。ただ残念なことに同書の叙述は、十分な歴史的知識を表現しておらず、やや遺憾である。代表的な論文である朱洪涛「思想・心態・立場——華北革大時期的沈從文述論」⁶⁾は、沈從文の1949年以降の思想変化のターニング・ポイントとなる時期の精神的発展について整理しているが、沈從文の華北革命大学での改造における、もろもろの不適應の表現について整理しただけであり、独立した視野と結論が欠けており、より政治的に正確な立場に立って知識人の改造方法の問題を議論している。これもまた、著者の異なる価値観で資料を処理して生まれた異なる効果を浮かび上がらせるものであろう。

沈從文の後半生は、自殺未遂と転向とをもって前半生と後半生との分水嶺としており、この

3) 張新穎「沈從文与二十世纪中国」『当代作家評論』, 2012年第6期

4) 李揚『沈從文的家国』上海交通大学出版社, 2015年

5) 李揚『沈從文的最後四十年』文史出版社, 2005年

6) 朱洪涛「思想・心態・立場——華北革大時期的沈從文述論」『当代作家評論』, 2015年第4期

問題をめぐる評論は数多い。しかし多くは表面的に語っている。ただ李斌の「沈従文与民盟」⁷⁾だけが注目に値する文章である。同論文は歴史の間隙に秘められた史料の発掘を通し、沈従文の自殺未遂という事件が形成した、読者の定型化したイメージ——1948年3月に郭沫若が発表した「斥反動文芸」の一文が沈従文を「ピンク色」の「反動」作家としたことによって、沈従文に極度の精神的緊張をもたらし、自殺未遂に追い込んだという見方を転覆させている。李斌は、史料の発掘を通し、沈従文は西南聯合大学時代に聞一多らの勧めによって民盟の活動に参加したことがあったが、結局民盟には加入しなかった。聞一多が犠牲になったとき、沈従文は声をあげていない。同論文は、沈従文と民盟との間には認識の違いによって一貫して矛盾が存在していた、聞一多と沈従文の共通の学生であり、民盟の主要メンバーであった王康（史靖）の「沈従文批判——這叫従現実學習嗎？」の一文こそ、沈従文の強い精神的ストレスをもたらした真の原因であり、沈従文の自殺未遂の、郭沫若にかわる重要な要因であった、とする。郭沫若を党の記号と見なしたうでの沈従文との関係やわたしたちが沈従文の内心世界を推測することに対して、同論文は重要な文章である。この論文の資料と持論は、やはりきわめて強い説得力をもつものである。しかし、同じ作者の「論抗戰結束後郭沫若对沈従文的批評」⁸⁾は、情緒的な傾向を有している。李斌は、1946-1948年の間に郭沫若は沈従文を四度にわたって批判したが、これは文芸界の枠内におさまる局所的な事件ではなく、国共双方、民盟を代表とする第三勢力、主要な新聞雑誌などの当時の中国でもっとも影響力を有していた各種の勢力に関連したものであり、さらに近代知識人の中国の運命に対する思考とそれにまつわる実践にも関係するものであって、現在の知識人の思索に関連する問題に対して、やはり現実的な意義を有している、と指摘する。この視点は有利な位置からのものであるが、同論文の多くの分析は、沈従文の言語の叙述の特色から沈従文を解説することに成功しておらず、一般的な語義から理解したものである。沈従文の聞一多に関する釈明は「自己を変革させ自己を再造させて適応する時代にあつて理想を追求し、ついに愚者の一撃によって損なわれた友人に対し、私は敬意に満ちあふれている。」ここの「愚者」は、著者のいうところによれば「反動派」とすべきである。『沈従文全集』では、この箇所は「反動派権力者の爪と牙の一撃」というふうに変更されている。実のところ、ここには言説の特色という問題が存在するのだ。言語の叙述の背後は思考様式であるが、沈従文の文学的叙述とイデオロギー化した言説の叙述とは、単純に同じ意味で解釈できるものではない。というのも、40年代の沈従文と革命者としての言説とは、決して一つの言説システムにあったわけではなく、沈従文には階級的な思考がなかったからである。私たちは、華北大学における沈従文の検査報告のたどたどしい叙述からも、それを理解できるであら

7) 李斌「沈従文与民盟」『文学評論』2016年第2期

8) 李斌「論抗戰結束後郭沫若对沈従文的批評」『中国現代文学研究叢刊』2013年第7期

う。しかし李斌の文章によっては、少なくとも審美化した沈從文が直面していた現実の複雑性がわかるだけである。

この時期に研究者・解志熙の沈学研究は、きわめて勤勉であり、その文学行為論の研究は忽視すべからざるトピックである。「愛欲抒写的詩と真——沈從文現代時期的文学行為叙論」⁹⁾の長文は、文献が示す沈從文の個人的行為、交際、人間関係を通して、沈從文の創作を解釈する。そのうちの沈從文の40年代の人生に対する考察は、各種の文献に浮上した沈從文の文学行為に対する心理分析を通して、沈從文が起こした40年代末の自殺未遂は、決して政治的な原因によるのではなく、家庭と個人心理の原因によってもたらされたのであり、いわゆる政治的原因というのは社会に受け入れられるべく行った一種の修辞に過ぎない、と大胆にも指摘する。この意見はいささか世間を驚かすところがあるものであるが、同論文は近年収集された多くの沈從文の佚文の基礎のうえに打ち立てられたものであるため、沈從文の事績研究に対して大きな影響をもたらすものかもしれない。「これらの佚文と過去の手紙を『沈從文全集』の関連する文献と比較して読むと、多くの意味ある『問題』の関連が発見できるだろう。さらにこれにしたがって考えてゆけば、沈從文の生活、思想、創作に対して、これまでのものとは異なる新しい認識に到達できるのではないか。……沈從文が焦慮していた問題は、(徹底的に追求すれば)、実際に原因がありながらも、心は別のことに向いており、その原因も流行している解釈のように単純なものでは決してないのである。」(「叙論」下) 沈從文研究は、名誉回復から賞賛へと、次第に神聖化してゆく方向にあり、「ひとりの少し保守的なところがあり、人並はずれて愛すべき『田舎者』が都市に出て、文学によって人間性を見守り、事業と愛情とで二重の成功を収める物語は、学界から世間まで興味深げに語られるうわしい伝奇となっている。……おびたしい数の文学史の論著でくりかえし論述されたことにより、このようなひとりの『田舎者』沈從文の『文学的標準像』は、深く人びとの心に入り込む存在であり、疑うべくもない定説となっているのである。」(「叙論」上) この意味からいって、解志熙の文章の観点は、いささか先鋭かつ偏頗なところがあるけれども、研究者としての理性、勇気と真理探究の精神とは、疑う余地なく尊敬すべきものであろう。

上述の創作の主体に主眼を置いた事績研究は、実際にはそれまでの呉投文の『沈從文的生命詩学』(2007)、康長福の『沈從文文学理想研究』(2007)、羅宗宇の『沈從文思想研究』(2008)、張森の『在「詩」と「史」之間——沈從文思想研究』(2008)などの、沈從文の前半生の思想研究の跡を継ぎ、いっそう実証性のある精神的な探究に近づいたものである。

9) 解志熙「愛欲抒写的詩と真——沈從文現代時期的文学行為叙論(上中下)」『中国現代文学研究叢刊』2012年第10、11、12期

二、書信研究——真実の浮上と幻滅、沈從文の文学的な交際と文学生産との読解

中国現代の著名作家の書信は、特殊な文学テキストであり、重要な文学研究の対象でもある。『沈從文家書』が初めて出版されたとき、一時よく売れたけれども、それが「オリジナル」の沈從文を明らかにしていたからであった。2003年に『沈從文全集』が出版された後、沈從文の書信によって沈從文と世界との関わりを探究することが重要な研究のポイントになった。中国知網（CNKI）で検索される研究資料が示すところでは、2010年以前の10年間に書信研究の文章は13編しかなかったが、その後の7年（2010年も含む）で31編の多きに達している。研究がおよぶ著名な現代作家や評論家の魯迅、胡適、郭沫若、冰心、老舍、丁玲、周揚、姚雪垠らから見れば、この複雑な文学的人物関係図は、小型の文学人物関係史にほかならないだろう。

俞汝捷の「沈從文致姚雪垠信」¹⁰⁾と呉永平の「也説沈從文的襟懷」¹¹⁾は、それぞれ姚雪垠が著名な歴史小説『李自成』を創作するに当たっての、沈從文の教えと友情とを紹介し、私たちが『李自成』の創作の経験を評価する際の、重要な参考資料となっている。梁小娟の「論沈從文的幹校書信和幹校詩」¹²⁾は、沈從文が咸寧に下放された後の農村の経験と農村の経験に刺激された詩歌の創作とを研究する。この文章は独特の視点を有している。つまり沈從文が晩年に創作した幹校詩への注目や、沈從文の書信と旧体詩の間に横たわるスケールの大きなコントラストと相互補完は、幹校文学の研究に対して重要な資料を提供するものであろう。著者は、書信に見える、沈從文の自我精神と審美意識とが直面した、特定の歴史的境遇における挑戦と苦境とは、中国知識人の生存の経験を照らしたものだ、とする。盧軍「從書信管窺沈從文撰写張鼎和伝記始末」¹³⁾、劉永春「沈從文書信中的文学批評活動概述」¹⁴⁾、盧軍「從『沈從文書信』解読沈從文与胡適關係」¹⁵⁾などは、多くの沈從文の創作構想、発表の全体的な筋道を提供し、沈學の濃霧を一掃することに対し、貴重な文学的現場の「証拠」を提示している。別の側面からいえば、書信の提供する糸口によって、また新たな研究の道が開かれ、沈從文の研究の領域は必然的にますます広くなり、またますます深くなるであろう。李瑋「50年代沈從文的文学守望」¹⁶⁾は、まさにその一例であり、沈從文と彼の作品とが50年代において否定されたことから、沈從文の文学生命がこれによって絶たれたとする考えは誤りであることを指摘する。沈從文の50年

10) 俞汝捷「沈從文致姚雪垠信」『新文学史料』2010年第3期

11) 呉永平「也説沈從文的襟懷」『博覽群書』2013年第4期

12) 梁小娟「論沈從文的幹校書信和幹校詩」『江漢論壇』2011年第10期

13) 盧軍「從書信管窺沈從文撰写張鼎和伝記始末」『文学評論』2011年第6期

14) 劉永春「沈從文書信中的文学批評活動概述」『海南師範大学学报（社会科学版）』2013年第2期

15) 盧軍「從『沈從文書信』解読沈從文与胡適關係」『中国石油大学学报（社会科学版）』2010年第3期

16) 李瑋「50年代沈從文的文学守望」『中国現代文学研究叢刊』2014年第9期

代の書信を概観すると、そこには一種の「建設」的文学批評観や「人間」を書く文学創作観や「情」のある審美芸術の追求が明示されている。これらの理念は書信研究の成果である。沈從文は50年代に基本的に文学創作を止めたけれども、書信において文学を見守りつづけていたのであった。書信の中の多くの優美な抒情、情景描写、人間を記した部分と外に向かって拡張する感情とによって、彼の書信は私語を書きつけた個人的空間を打ち破り、高い審美的な価値を備えており、「潜在的創作」¹⁷⁾の重要な支流なのである。

沈從文と友人との書信は、沈學の研究空間を大きく開拓するであろう。『沈從文全集』が出版され、大量の書信資料が含まれてから、張新穎が『沈從文的後半生 1948-1988』の創作を真に開始したことは、まさにその明らかな証拠となる。書信研究者の任葆華は「沈從文与趙樹理」, 「沈從文与老舍の疎離与遥望」, 「沈從文看文学史叙述中的自己」, 「沈從文書信中的郭沫若」, 「沈從文的另一面」, 「沈從文与周揚」, 「沈從文評說冰心其人其作」などの多くの書信研究の文章を書いた後、「關於沈從文書信研究的設想」¹⁸⁾を発表し、沈從文の書信は非常に重要な文学史料としての価値を有するものであり、書信研究は沈從文研究の新領域を開拓するとともに、未来の沈從文研究が従来の研究を突破するためのポイントとなりうるものであろう、とする。あわせて、未来の沈從文の書信研究に対して、具体的なルート・マップを示し、特に作家関係、文学的価値、学術的価値などが書信研究の主要な内容となるべきことを強調した。著者は、研究はテキストの精読から出発し、全体的な観照を行い、それとともに他人の文献資料を参照して証拠を補強すべきだとする。

文人間の書信は、双方のそのときその地の思想・感情の状況を表現しつつ、さらに双方が文学に対する見解と理解とを述べる文学的交渉の方法である。それとともに双方の文学的交際、文学生産などの文学活動を考察する重要な参考資料でもある。作家を中心とする、あるいは作品を中心とする研究が鈍化した後、書信研究が作家の文学創作に対する深い認識を示す重要な研究であることは、疑う余地のないものである。

三、版本研究——源流の考証解釈、歴史の中のテキストの復元

中国現代文学研究は、すでに70年になんなんとする時空を越え、読解の視野の変化、イデオロギー言説の異動によって、版本の修訂が中国現代作家と作品における、とりわけ突出した問題となっている。沈從文作品の版本に関する研究の文章は多く、この時期に羅宗宇・曾婷「論

17) 「潜在的創作」は陳思和が『中国当代文学史』で提起した概念である。「この単語は当代文学の創作の複雑性を説明するためのものである。」

18) 任葆華「關於沈從文書信研究的設想」『渭南師範学院学報』2013年第5期

小説『辺城』的当代伝播¹⁹⁾、李宗剛・李国聡「作家全集需注重对作品原貌的呈现」²⁰⁾、彭林祥「『從文自伝』的版本問題」²¹⁾は代表的といってよい文章である。「論小説『辺城』的当代伝播」は、『辺城』の版本史料情報の集合体であり、同論文は『辺城』が出版された後の普及状況を全面的に紹介し、全体が五つの部分に分かれる。すなわち異なる時期の『辺城』小説（挿絵なども含む）版本、『辺城』の海外翻訳版本、『辺城』の映画改編状況、『辺城』の大学、高校・中学校文学作品選あるいは国語教材の収録状況、『辺城』の代表的な評論と文学史の評価の状況である。同論文は『辺城』が出版されて以降、もっとも豊富な版本目録集であり、資料収集の方法がきわめて緻密である。李宗剛・李国聡および彭林祥の文章は版本を議論し、いずれも『沈從文全集』の作品収録の方法が粗忽であることを指摘する。だが、前者は全集の編集修訂における初出版本の軽視を指向し、後者は版本の変化の要素と善悪とによって生まれる価値の分析に重きを置いている。「作家全集需注重对作品原貌的呈现」は、『沈從文全集』が収録する講演原稿「短編小説」²²⁾を例として、初出版本の重要性を強調している。この論文は、沈從文が初めて授業を行ったときを回想した文章の変更点や胡適に関する文章の削除を通して、版本に影響をあたえた三つの要素を提起している。すなわち、たびかさなる叙述による曖昧さと偏向、時代の政治的要素、主体が成熟する過程の精神的認識の変化である。「『沈從文全集』が収録する「短編小説」の校勘を通して、作家全集においては、版本の選択が特に際立った問題であることが看取できるであろう。このことは、私たちが作家の思想を解説することや文学史のディスカールに直接関係するのである。」全集の編集・校勘は、初出版本が明晰に呈示されなければならないばかりか、後の修訂版本についても正確に把握するべきであって、そうであってこそ、より優れた形で歴史の現場に足を踏み入れられるのであり、文学史のディスカールにおいて文学が発展する過程の内在的な条理と規律とを示すことができるのである。この論文は、沈從文の「短編小説」の

19) 羅宗宇・曾婷「論小説『辺城』的当代伝播」『創作与評論』2015年第20期

20) 李宗剛・李国聡「作家全集需注重对作品原貌的呈现」『理論学刊』2014年第6期

21) 彭林祥「『從文自伝』的版本問題」『中国現代文学研究叢刊』2016年第3期

22) 沈從文「短編小説」『国文月刊』1942年第18号。原文では、往事に言及し、沈從文が呉淞の中国公学ではじめて授業をしたときの情景を次のように描写する。「たしか民国18年の秋……私はもちろん休憩していたが、実のことをいえば、私のボサボサの頭と狼狽した様子とを、みなに鑑賞させていたのだ。だが、苦痛のうちにあって、私も教室の人びとの頭をひとつひとつ鑑賞することになったのである。」「授業のとき、110人の人間の頭が下で動くのだけが見えた。私は多くの頭が必ず同じように動くものだと思った。私は思った。『私の講演を見に来た人たちと、私は何を話したらよいのだろうか。』なので、私は黒板に一行の文字を書いた。『諸君、私を十分間休ませてくれたまえ。』私の心は、私たちはみな見てみるわけだが、誰よりも深く見ている、ということであった。……とうとう私は口を開いた。ちょっと話したら、もう2時間であった。」沈從文が巴金に対して語ったとき、言うことが変化しており、梁実秋によって伝えられたことも異なっている。『全集』は多くの部分を省略している。しかも胡適をほめた文は、跡形もなくなっている。

削除を分析し、要点を得たものとなっており、とりわけ精彩を放っている。彭林祥『『従文自伝』的版本問題』は、『従文自伝』は六度にわたって改訂されており、良友本、開明本、人文本、選集本、文集本などが存在し、著者は文集本『従文自伝』がもっとも全面的なものであり、『全集』は文集本を採録すべきであったが、『全集』は単純に開明本を採録しており、穏当を欠く嫌いがある、とする。この見方は、李宗剛・李国聡の文章とまさに正反対である。もちろん著者も余地を残しており、そのようにすべきではあるが、全集に収録した後にテキストの変化について注釈と説明とを加えるべきである、としている。

この時期、沈從文の佚文に関わる発掘も、衆目を集めるポイントとなった。裴春芳は『經典的誕生』²³⁾を出版し、それまでに発表した沈從文「摘星録」の多くの版本の佚文を輯録している。同書は、京派文学作品の研究ではあるものの、沈從文の叙事言説についての研究が紙幅の半分を占めている。解志熙・裴春芳・陳越の「沈從文佚文廢郵再拾」²⁴⁾は、沈從文の書信、読書ノートおよび雑文14編を輯録する。この14編の文章に対し、解志熙は「遺文疑問待平章」²⁵⁾において「友情と愛情の痕跡」と「愛国と愛欲の焦燥」とに分けて解説と整理とを加えている。これらの文章は、それに先立つ2009年前後にさがしあてた沈從文の佚文を結合させ、沈從文と『戦国策』派の関係や沈從文の40年代の思想への認識や建国後の転向への認識に対して、重要な意味をもつものである。解志熙と裴春芳らによる沈從文が40年代に発表した雑文と書信についての発掘は、沈從文の40年代後期における思想的变化の研究に対してきわめて大きな価値をもつものである。それ以外の版本研究は、「摘星録」、「蕭蕭」、「看虹録」、「水雲」、「紳士の太太」などの作品におよぶ。商金林「關於『摘星録』考釈的若干商榷」²⁶⁾は、「摘星録」が言及する人物の原型を考証しており、引用が豊富であり、論証も精緻であって、一読に値する。同論文は裴春芳らによる沈從文解釈への質疑とみなすべきであり、現在の中国現当代文学研究界が版本分析と創作の解釈とを生活化させる傾向にあることへの警鐘の意味をもつものである。

現在の沈從文研究からみれば、佚文の輯録と版本研究は、単純なテキスト解釈よりも、いっそう堅実なものである。版本の重視と新資料とは、沈從文研究に対して、価値のある影響と啓発とを有するものであろう。

四、物質文化研究：沈從文の物質文化研究の道程と転向の解釈

21世紀に入ってから、沈從文の物質文化領域における貢献と影響とは、しかるべき木魂を

23) 裴春芳『經典的誕生』社会科学文献出版社、2014年

24) 解志熙・裴春芳・陳越「沈從文佚文廢郵再拾」『中国現代文学研究叢刊』2010年第10期

25) 解志熙「遺文疑問待平章」『中国現代文学研究叢刊』2010年第10期

26) 商金林「關於『摘星録』考釈的若干商榷」『名作欣賞』2011年第28期

返すよう学術界に求めた。張鑫・李建平「近三十年来沈從文物質文化史研究述評」²⁷⁾は、前期の関連する研究を総括する。同論文は、沈從文の物質文化史研究について、方法論の洗練と総括、文化的成果の普及と伝承、文化的価値の再認識、未完の課題の継続した研究が、今後の方向となるべきである、と指摘する。実際には、沈從文の物質文化研究については、大きな背景——すなわち中国現代文化の発展のニーズも存在する。このため、沈從文の物質文化の研究には、文化的成果の受け入れと伝承から、沈從文の転向に対する再認識、さらには沈從文の文学的成果および人格や精神の伝承によって派生する文化的新機軸の問題も存在する。2010年以降、沈從文の物質文化研究にまつわる研究は、依然として十分に豊かなものであるとはいえないけれども、一部の新しい思想には大いに啓発されるところがある。

沈從文の物質文化研究の代表的な文章に李之檀の「沈從文先生的服飾研究歷程」²⁸⁾シリーズがある。この文章は、沈從文の人生経歴を紹介した後で、沈從文が文物を愛好するにいたったそもそもの動機を解釈し、陳渠珍に雇われて書籍と骨董を管理したことによって最初の興味が引き起こされ、後期には文物の愛好が郷土愛の深化となった、とする。沈從文は、ある時期、いたるところで文物を探し、人間の知恵に対する理解を深めた。著者は、証人として、沈從文の一生において文物研究に執着するようになった道程を細かく洗い出し、沈從文を理解するための多くの具体的な資料を提供しているが、新しい観念と思想とに欠けている。このほか劉媛の「書写『有情』の歴史：沈從文の文物研究之路」²⁹⁾などもこれに類似する。張新穎は、「“聯接歴史溝通人我”而長久活在歷史中」³⁰⁾で、沈從文の転向の謎に対して新しい視角を提供している。張氏は『從文自伝』などの史料を改めて精読し、沈從文の文学創作と文物研究とは相通じるものであり、沈從文が「愛好したのは美術にかぎらず、感動的な作品を生み出す性格の心、真の『人間』の素朴な心を、よりいっそう愛した」とする。このため、「文物と文物は、それぞれ孤立したものではなく、それらがそれぞれ潜ませていた情報が開かれた後、連結し、交流し、疎通し、融合し、最終的に合流して歴史文化の長い河になり、人間の労働や智慧や創造のエネルギーの永続が浮かび上がる。工芸器物が構成する物質文化史は、まさに一代また一代と普通の無名の人びとが受けつぐことで成立する。」まさにこのような疎通があつてこそ、沈從文の転向があつても、方向を見失わなかったのである。沈從文は、もっとも素朴な方法で文物を研究したことによって、訓練を経た歴史学者を越えたのである。同じく上海の研究者として

27) 張鑫・李建平「近三十年来沈從文物質文化史研究述評」『淮陰師範学院学報（哲学社会科学版）』2013年第1期

28) 李之檀「沈從文先生的服飾研究歷程（1-4）」『芸術設計研究』2014年第2、3、4期、2015年第1期

29) 劉媛「書写『有情』の歴史：沈從文の文物研究之路」『美術觀察』2016年第4期

30) 張新穎「“聯接歴史溝通人我”而長久活在歷史中」『中国現代文学研究叢刊』2012年第6期

陳彦は、「物恋”与“写作”——再論沈從文的物質文化研究」³¹⁾で、沈從文の転向に対してより具体的に解釈した。陳氏は物質文化史の視野を越えて、沈從文の創作能力の獲得と芸術品の知識の学習とを結びつけ、新たな発見をした。著者は次のようにいう。経済的条件に制限された沈從文は、収蔵された伝統的な金石字画と異なった文物によって、新たなデリケートさを獲得し、芸術品の系譜を広げたのであった。沈從文は「これらの辺鄙な地区では、日常の器具において、古典的な伝統的地域性の様式の混合を見いだすことができるだろう。歴史を理解するという目的から出発したならば、そのささやかな品物は極めて高い認識と研究の価値を有している。」沈從文が収集したモノ（民間工芸品）は、もはや伝統的な意味でいう伝達手段（伝統的な金石字画における）ではなく、人間の愛欲の経験にもとづく美の創造であり、「あらゆる美術品は、作者の生活の苦闘の形式と智慧の物差しとを含んでいるため、私の理解も深く細かくなる。」著者は、沈從文が小さなモノに留意したのは、そもそも愛欲が変化したものであるけれども、忍耐と愛好とによって多くのモノにまつわる知識を獲得し、モノから人間にいたり、さらに抽象的な境界の美に昇華した、とする。沈從文は、モノに対するこだわりの中で、美が精神の形式であるとともに歴史性を深く備えたものであることも理解したのであった。このような理解によって、沈從文は独特な創作方法を獲得した。それは、すなわち、沈從文が熟知する地方の人物や地方の生活に対する、深く細やかな精神的な描写と歴史の叙述である。その後、沈從文が内心の通りに創作できなくなったとき、物質文化史研究者としての沈從文は、『中国古代服飾研究』は叙事と構造において文学の方法を継承しており、規模においては長編小説であり、叙述の方法においては章立てをして叙述する散文である、すなわち非主題性や経験の断片や心理描写や言行描写が織りなす文学叙述の形式である、とみずから語っている。陳彦の分析は、本質的であるとともに細密であり、沈從文が物質文化研究に転向したことをめぐる解釈のうちでもっとも独創的な説明であるといえよう。

煙雨長河が鳳凰古城にあって印象的な山水としての上演を行うのにもなって、沈從文の文学作品にもとづく文化的創造と開発とは、物質文化研究における新たな視角となった。呉瓊「基於沈從文文学作品の湘西旅游開發研究」³²⁾、安寧らによる「文学旅游地的空間重構研究——以鳳凰古城為例」³³⁾、劉晨「文学旅游地的社会文化建構：以鳳凰古城為例」³⁴⁾および梁子玉が鳳凰旅行の發展を事例として行った「文化變遷与旅游發展研究」³⁵⁾は、いずれも沈從文の文化的効果を課題研究のポイントとする。まさに「文化變遷与旅游發展研究」が指摘するように、「多く

31) 陳彦「“物恋”与“写作”——再論沈從文的物質文化研究」『文学評論』2015年第4期

32) 呉瓊「基於沈從文文学作品の湘西旅游開發研究」『文学教育（下）』2015年第4期

33) 安寧「文学旅游地的空間重構研究——以鳳凰古城為例」『地理科学』2014年第12期

34) 劉晨「文学旅游地的社会文化建構：以鳳凰古城為例」『旅游学刊』2014年第7期

35) 梁子玉「文化變遷与旅游發展研究」博士論文、中央民族大学、2007年

の人びとは、沈從文の『辺城』を通して、ようやく湖南の湘西に鳳凰と呼ばれる歴史的都市があることを知ったのである。鳳凰は沈從文と『辺城』とによって有名になったのだ。」これらの文章は深みに欠けるものの、物質文化の派生研究という観点から見れば、文学から越境した後の文化研究の重要な課題となりうるものであろう。中国経済の発展は、文化の構築のために巨大な空間を創造した。沈從文はひとりの作家であるだけでなく、重要な文化的資源でもある。沈從文と地域文化の生産の関係には、景観文化と文学叙事の間テキスト性などもあり、注目すべき開拓の余地を有する。

五、創作研究——郷土の外にあって沈從文の郷土叙事を觀照する

沈從文の文学創作についての研究は新世紀に入ってから高揚期を迎え、基本的にテキスト研究と思想研究の多くの次元を包括する。2010年以降、この領域の研究は大多数が過去の基礎にもとづく深化であった。たとえば、褚連波「湘西文化与沈從文小説創作」³⁶⁾、史玉豊「二十世紀中国文学中的尋根研究」³⁷⁾、唐東堰「生命迷狂与神秘智慧」³⁸⁾などがあり、比較研究には孫英馨「沈從文与勞倫斯生命價值書写的比較研究」³⁹⁾や民族的な視野と結びつけた魏巍「少数民族視野下的沈從文与老舍比較研究」⁴⁰⁾やテキストと結びつけた陳彩林「民族生命本体的形而上現代重構——『野草』与『燭虛』比較研究」⁴¹⁾があり、このほかにも詹琳「文学大衆化的想象与实践——沈從文現象与趙樹理現象的对比」⁴²⁾がある。

坂本達夫の「試論沈從文小説中有關動物意象的修辭運用」⁴³⁾は新たな視点である。同論文は、人物創造、空間的情景および精神的領域の次元で、沈從文の小説創作の中で動物のイメージを語って修辭をほどこす46部の典型的な作品を高いレベルで概括しており、沈從文の動物修辭小説全体に対して多角的なテキストの総合分析を行っている。これと呼応するのは、多くの形象分析のテキストの中にあって、イメージ分析がひとつの研究方法となったことである。たとえば、白菜と菊の花のイメージによって作者の創作の立場と革命の態度とを分析した「從白菜

36) 褚連波「湘西文化与沈從文小説創作」博士論文、東北師範大学、2010年

37) 史玉豊「二十世紀中国文学中的尋根研究」博士論文、山東師範大学、2012年

38) 唐東堰「生命迷狂与神秘智慧」博士論文、湖南師範大学、2011年

39) 孫英馨「沈從文与勞倫斯生命價值書写的比較研究」博士論文、吉林大学、2013年

40) 魏巍「少数民族視野下的沈從文与老舍比較研究」博士論文、陝西師範大学、2012年

41) 陳彩林「民族生命本体的形而上現代重構——『野草』与『燭虛』比較研究」博士論文、湖南師範大学、2014年

42) 詹琳「文学大衆化的想象与实践——沈從文現象与趙樹理現象的对比」博士論文、湖南師範大学、2012年

43) 坂本達夫「試論沈從文小説中有關動物意象的修辭運用」博士論文、復旦大学、2011年

和菊花意象看沈從文『菜園』⁴⁴⁾があり、このほかにも沈從文の筆になる魚のイメージと苗族の魚トーテムとの関係を分析した「沈從文小説中的魚意象」⁴⁵⁾などがある。

沈從文のもっとも影響力を備えた郷土小説についての研究を展開するとき、新しい学術理論を運用して思考する研究者が不断に現れている。王曉文「中国現代辺地小説研究」⁴⁶⁾では、沈從文を重点的な事例として、中国現代辺境小説の審美的空間の構築と地縁文化の特質との関係を議論するとき、まさしく辺境の独特な空間があってこそ、沈從文の多くの小説（「媚金、豹子、与那羊」、「三三」、「三個男人与一個女人」）の悲しくも美しい愛情物語が生まれたのだ、とする。現代の空間理論は、かつての文学理論の観念の様式あるいは時間の様式の二次元の思惟を乗り越えており、著者の空間理論についての応用は、疑う余地なく辺境小説の人類文化的な価値を深化させている。何小平の「論沈從文『湘西』的民族誌書写」⁴⁷⁾、「論沈從文的民族誌書写」⁴⁸⁾は、人類学の理論が広範に徴用される学術的な言語環境において展開されたものであり、沈從文の創作と人類学、民俗学の理論とを深く符合させることによって、私たちに深い印象を残す。「論沈從文『湘西』的民族誌書写」において、著者は、『湘西』が沈從文の湘西文化に対する理解と解釈の内部的、外部的視野の融合や文化思想における相對觀と文化全体觀との結合を高いレベルで実現したものとす。「論沈從文的民族誌書写」は、沈從文の文学創作と文化ディスクールの活動であるテキストは二つの側面を含むとする。ひとつの側面は文化の思考を表現した文学テキストであり、いまひとつの側面は文学的手段によって書きあげられた文化テキスト、すなわち民族誌テキストである。両者は共同で湘西と現代都市についての文化的思考を指向し、ふたつのカテゴリーのテキストはいずれも鮮明な民族誌の特徴を備える。まさしくこのような視野によって、沈從文は次第に国家全体の文化の角度に立って湘西文化と都市文化とに関心を抱き、両者を思考していったのだ、とする。

前述の郷土のディスクールそのものに対する認識と異なり、張新穎は、当代作家の余華、賈平凹、王安憶の創作との比較を通して、沈從文の現在における伝統としての価値を指摘する。「中国当代文学中沈從文傳統的回響」⁴⁹⁾において、著者は次のようにいう。余華『活着』における福貴は、沈從文の筆になる湘西の船乗り（「1934年1月18日」）と、実のところ同様の人間である。彼らは、生きることの外にある“意義”を問いかけることなく生きており、生きること自体に忠実であることによって生存と生命とがおのずと莊嚴さを示している。しかも、中国

44) 洪永春「從白菜和菊花意象看沈從文『菜園』的思想意蘊」『文学教育』2015年第3期

45) 胡斌・周時富「沈從文小説中的魚意象」『厦門理工学院学報』2011年第2期

46) 王曉文「中国現代辺地小説研究」博士論文、山東師範大学、2009年

47) 何小平「論沈從文『湘西』的民族誌書写」『民族文学研究』2013年第3期

48) 何小平「論沈從文的民族誌書写」『吉首大学学报（社会科学版）』2012年第6期

49) 張新穎「中国当代文学中沈從文傳統的回響」『南方文壇』2011年第6期

の現在の郷土が衰退してゆく方向は、沈從文が書けなかった長編小説『長河』の延長である。『長河』の記述する湘西の郷土は、艱難辛苦が訪れようとする、まさに失われてゆく“辺城”である。賈平凹の『秦腔』は、『長河』の書きあげられた部分と、書かれなかったけれども呼べば現れるまでになっていた部分とに呼応している。『古炉』は、ためらうことなく『長河』がとどまった場所から下流に向けて書き継がれており、呼応するのは『長河』の書かれなかった部分である。賈平凹の困惑は、農村が衰退し、「土地も今後、消えてしまうのではないか」といったことにあるのであり、実際にはこういった思考は沈從文のところでもすでにはじめられていたのであった。だが、賈平凹はいっそう理性的であり、沈從文よりもいっそう残忍である。そのいっぽうで王安憶の『天香』は、沈從文の文物に対する態度に対応するだろう。“天香園刺繍”の歴史もまた、沈從文が身を投じた物質文化史の、一筋の支流である。沈從文は、このような普通の人びとの生命の情報を潜ませた歴史を、彼の心中の“真の歴史”とし、このような歴史の長い河のような已まざる流れを深い敬意をもって叙述したのであった。これに相通ずる体験と理解とは、王安憶が“天香園刺繍”自身の曲折や力や活気を描き出すのを、同じように支えているのである。ここで私たちが注目するのに値するのは、張新穎氏の分析だけではない。より重要なのは、張氏が中国現代文学と当代文学の創作を整合させようとつとめていることであり、文学の叙述の中から思想の発展変化と転移の努力とを探していることである。これによって、時空を突き抜け、昨日と今日とを認識する。このような努力は、まさしく私たちの今日の研究と批評とに欠けるところのものであろう。

既存の沈從文の郷土叙事に関する研究は、その叙事の本質と特徴とを一貫して強調しており、郷土の外に飛び出して観照したものは少数に属する。張潔宇は、「京派：未尽的学院派追求」⁵⁰⁾で沈從文の文学的主張を例にとり、京派と海派の特質を議論する。張氏は次のようにいう。京派と海派とは地域によって命名された文学流派ではあるが、京派の郷土への想像と海派の植民と資本の二重性などの特徴についての叙述は、京派の純粹に独立した純文学的な立場や混じり気がなく古風な芸術的風格や主題における人間性と自然に対する強調といった思想的価値と芸術的追求の背後に存在するアカデミズム意識を軽視している。京派の形成については、北京という都市よりも、むしろ大学が成因である。1928年に国民政府が南京に遷都した後、北平は文化古都として大学キャンパス文化がその核心となり、京派の発生に対して重大な影響をあたえたのであった。京派詩人の卞之琳のいう「むしろアカデミズム派と呼ぶべきである」の意味は、まさにここにある。沈從文が論争をたきつけた「文学者の態度」は、アカデミズム派の語を使ってはいないけれども、その思想の核心は、文学の職業精神と政治に介入する態度であり、「主張も作品の中に置く」ことであった。この二者が示す京派文学の立場と“文学地”が歴史

50) 張潔宇「京派：未尽的学院派追求」『文芸報』2015年9月30日

に介入する方法とには、いずれもアカデミズムの影響を看取できるだろう。創作の個体についていえば、このような京派の内包する精神の分析によっても、私たちは沈從文がもっともよく京派の文学的風格を体現した郷土のディスクールに対する新たな認識——すなわちアカデミズム派の影響がひとつの重要な側面であること——を得るのである。同論文は、呉世勇の「影響沈從文創作的六因素（郷土，都市，出版，大学，女性，政治）」⁵¹⁾の見解を深化させ、それとともに『辺城』のような郷土のディスクールがなぜあのように美しい生命の境界を呈することになったのか——アカデミズム派の視野で農村を觀照することによって形づくられた現実が想像の昇華を獲得したのだということを、私たちに教えてくれるのである。

謝有順の「中国小説叙事倫理的現代転向」⁵²⁾は、別の角度から沈從文の郷土創作に注目し、小説叙事の倫理の観点から沈從文の郷土のディスクールを議論する。謝氏によれば、「真の文学は曖昧な叙事であり、それは往々にして是非を判断せず、善悪を決断せず、生活のために結論を下さず、良知の裁判も行わない。そうではなくて、できるかぎりひとりの人間を理解しようとし、彼の生命の中のあらゆる体験と異変とを理解する。理解しようとするのであって、決して決断しようとするのではない。これが文学叙事のもっとも基本的な倫理のひとつである。」「沈從文は感傷を抱きつつ暴力を書く。暴力がどれほど強大で無敵かを示すためでなく、救うためであり、見るためである。彼の小説では、果てしない愛が想像されている。なぜならば、愛があつてこそ、衝突の重荷を引き受け和解させられるからである。愛があつてこそ、眼中に敵なき暴力の頭を垂れさせることができるからである。やはり沈從文は始終、愛を農村に預託した。遙かなたの虫や鳥が鳴き、松が落ち、雪が舞い落ち、風が吹き、肉体と靈魂との出会いをもっともよくとりもつことができ、美と善と愛とをあわせてひとつにすることができ、悪意のない生命の景観を賛美でき、曠野での自由な呼吸を解き放つことができる——これが一貫した沈從文の創作倫理なのだ。」「赤魘」、「雪晴」、「巧秀与冬生」、「伝奇不奇」の分析を通して、謝有順は、沈從文が「革命の激情をさしおきはしないが、革命の激情について迂回した見かたをもっていた。彼の作品は恐懼と懷疑と不安とを密かに隠しつつも、沈從文は愛の力によって暴力の残虐な破壊を防御することを想像したのである」とする。

任曉兵「上海租界語境下沈從文小説創作中的“民族国家想像”」⁵³⁾は、沈從文の郷土の叙事の価値と動機の、いまひとつの解釈を提示する。上海租界における寄寓生活の生命の体験が沈從文を刺激し、強烈な“民族”的な屈辱感と租界の植民地言説の侮辱とによって、彼は理性の面

51) 呉世勇「影響沈從文創作的六因素（郷土，都市，出版，大学，女性，政治）」博士論文，華東師範大学，2006年

52) 謝有順「中国小説叙事倫理的現代転向」博士論文，復旦大学，2010年

53) 任曉兵「上海租界語境下沈從文小説創作中的“民族国家想像”」『吉首大学学报（社会科学版）』2012年第6期

で自分のミャオ族の身分を受け入れたのであった。ミャオ族に関する歴史の記憶、民間伝説、神話物語、儺神祭祀の信仰活動などの民俗文化をディスクールの中心とするとき、それとともにミャオ族というエスニック・グループの善良で素朴な徳行や品性を“民族”文化の再造についての思考とし、民族の“想像の共同体”という集體的記憶の“認知物”を形づくり、さらに“中華民族”という民族国家に対する想像性の構築のアイデンティティーを完成させている。沈従文は青島で生活している時期に思索の蓄積した郷土文学の創作に入り込み、具体化した「民俗のディスクール、エスニック・グループの記憶、民族、国家」の思考は、「民俗のディスクールがミャオ族の集體的なアイデンティティーの記憶を構築する」初級の段階を越えており、湘西の社会、人事、情景に対する民俗のディスクールを通して、全体において“中華民族”という斬新なイメージの構築を行うまでの高みにまで上昇している。“民族国家の想像”に関しては、一貫して中国現代文学研究の重要な言説であり、任曉兵の文章の、沈従文が構築した湘西世界に対する思考は、それに対する一種の呼応である。

沈学研究が30年の時間を閲した後の展開には、多くの新しい注目すべきポイントがあり、沈従文の文学創作とそのほかの芸術部門とを結合対比させて研究することが新しい方向となった。たとえば、音楽、美術の沈従文の文学創作に対する影響である。さらに沈従文の伝記文学を文学の一部門とする研究も注目を集めている。沈従文研究に対する研究もこの時期に成長した。たとえば『中外沈従文研究学者訪談録』⁵⁴⁾の出版であるが、紙幅にかぎりがあるので、逐一説明はしないことにする。

結語

上述の研究は、文学研究がひとつの意識系統として内発的に発展、深化をしたほかに、中国の現代化のプロセスおよび現代文化の発展の文学研究に対する影響や相互関係を集中的に示している。中国の現代化のプロセスの加速にともなって、中国は不断に世界に溶け込み、国家イデオロギーの影響が弱まり、自由主義と個人主義が顕著になり、文学の研究の中にも浸透してきた。グローバル化の視野の中にある中国の民族国家のイメージの構築と地域文化の価値の浮上もまた、私たちの沈従文とその創作への認識に影響をあたえている。具体的に言うと、沈従文の研究は、以下の特徴を示している。

1. 新資料の出現が新しい研究の共通基盤の誕生をうながしたこと。

文学研究は観念の刷新にほかならず、資料の増加と方法の刷新とは幾筋かの道程である。『沈従文全集』の大量の書信が世に出て、沈従文研究の視野を大きく変え、もちろん沈従文研究の空間も大きく開拓した。書信は文学創作のオリジナルな場に対する復元であり、私たちの創作

54) 張曉眉『中外沈従文研究学者訪談録』北岳文芸出版社、2015年

に対する認識を深化させるものである。数年の醸成期間を経て、2010年以降の書信研究は研究の前線へ正式に歩みを進めたのであった。それ以前にキンクレー氏、凌宇氏がインタビューを通して大量の第一次資料を得たが、書信の出版は研究を共通基盤化し、それによって沈從文の研究を推進した。

2. 新しい文化的言語環境が新しい研究の視角をもたらしたこと。

学術的価値の観点から見ると、沈從文の物質文化研究は疑う余地なくひとつの高峰であり、その研究方法と理念は当然伝承されるべきものである。しかし、いっそう重要なのは、研究者が沈從文の心情を読解してこそ、彼の文化遺産を継承できることである。沈從文が実際の文物に対する賞翫を通して構築した文物研究は、現代の歴史的な研究方法とまったく異なっており、典型的な中国の伝統的な読書人生活の派生物であるとともに、西洋伝統の執着をも吸収している。このため、沈從文が完成させたのは、『中国古代服飾研究』であって、李漁の『閑情偶寄』ではないのである。それは実際には生活様式の具現であるとみなすことができよう。もしもこの点を認識できず、現代のいわゆる学術的な慣例によって沈從文が残した遺産を処理したならば、疑いなく隔靴搔痒なものになるであろう。まさに新しい時代はより大きな物質文化の多様性をもたらしており、それによってこそ研究者たちは沈從文の転向を深く理解する可能性をもったのである。沈從文に対する研究の中から、現代と中国の伝統とをつなげる道路を探しあてることができるだろう。

これと呼応することは、沈從文の精神世界についての表象化し景観化した叙事は、新しい沈從文文化を完成させるはずである。文化の視角から沈從文の文学世界をいかに解釈するかということは、今日の現実が文学に対して行う質問である。沈從文の文学世界と鳳凰、茶洞の景観の産出は、沈從文研究の成長のポイントとなるものであろう。

3. 新しい時代言語環境が新しい言説空間をもたらしたこと。

個体の価値の歴史における位置についての再評価は、張新穎の『沈從文的後半生』のテーマのひとつであった。この認識には時代の烙印が打たれている。これはまた新しい時代が提供する言説でもある。同様に、中国の現代化のプロセスの中で、郷土の荒原化はもはや感覚や想像ではなく、現実である。賈平凹が30年余りつづけてきた郷土叙事の中に実証を得ることができる。沈從文の湘西世界は、現代に足を踏み入れた中国人の往時に対する夢想となっており、土地、景観、民俗の大きな変遷は、沈從文作品の郷土の価値をますます浮かび上がらせる。こうして沈從文の湘西叙事は、現代文学の中でもっとも人類学的な意味と価値とをそなえた写実であり、また文学化した郷土の存在は、歴史的価値と審美的価値とを兼ね備えるものでもある。このため沈從文の湘西地理志の叙事と民族文化の叙事とは、よりいっそう注目を集めるはずであり、研究もよりいっそう深化するものであろう。中国社会の巨大な変遷と急速な転向も、沈從文のような深く細かく描写した郷土に存在の重要性を賦与する。豊かで多様な文学の審美空

間を構築するため、中国現代作家は歴史の時間の前進の中で文化中国と文学中国に対する本質的な思考を表現し、作家それぞれに創作の出発点と着眼点は違うけれども、いずれも本質的な民族的アイデンティティ感表現している。この種の構築の方法は、西洋知識人の時間の流れに対する、つかみどころのない焦燥感とは異なった、一種の焦燥感を具現している。これらの思想は、今後の沈従文研究の中で次第にその姿を現してくるであろう。

注記

本文は、2016年6～11月に富山大学人文学部に客員研究員として滞在された羅勛章・長江大学文學院教授が科学研究費基盤研究(C)「文化都市・青島における知識人ネットワークと都市表象の研究」(研究代表者：齊藤大紀、課題番号：JP15K02431)の研究例会(2016年6月18日、於神奈川大学)において報告した原稿を翻訳したものである。